

ベトナムと日本の架け橋に

「え？え？何これ？」

ベトナムの都市ホー・チミンに降り立った私には、そんな言葉しか出てこなかった。

私はこの夏、ベトナムを訪れた。ベトナムは三ヶ月前に父が転勤した国だ。初めて訪れる海外の国。ベトナムに行くことが決まった日、私は地図帳を開き、ベトナムの位置を確かめた。同じアジア……。縦に長細い……。

『なんだか日本と似ているなあ。でも、あまりなじみがない……。』それが私の第一印象だった。しかし、ベトナムは意外にも私たちの身近な存在であることも知った。友だちとよく行く雑貨屋に置かれているかわいらしい置物や、鮮やかな色彩で編み込まれた布製のバッグはどれも『メイドインベトナム』だった。また、父が3月まで勤めていた袋井の工場にはベトナムから日本の技術を学びに来ている人がいることも知った。ベトナムに行くことが決まってから、私とベトナムの距離は急速に縮まった。

しかし、信号のない交差点を行き交う無数のオートバイと鳴り響くクラクション。そして何より、日本では味わったことがない人々の熱気と活気。この国のエネルギーを目の前にして、縮まったはずの距離は一気に広がった。バスに乗り市内を移動する間も、私の気持ちは何だか落ち着かなかった。レロイ通りの交差点で私たちのバスがとまったとき、私の目はあるものに釘付けになった。男性の顔の大きな像。鋭い眼光で私をにらんでいるようだった。バスを降り、父がこの男性は「ファン・ボー・チャウ」という名前であることを教えてくれた。ベトナムの中学校の教科書に必ず出てくる人物であり、今のベトナムの基礎を築いた独立運動家だとも聞いた。

この時は、まさか私の住む袋井市と大きく関係している人物だとは想像もできなかった。しかし、父から続けて聞いた話は異国にいる私の心を、故郷の袋井へと引き戻してくれる内容だった。



ファン・ボー・チャウが生きていた時代は今から一〇〇年以上前の明治三十八年（一九〇五）にさかのぼる。当時のベトナムはフランスの植民地で、多くのベトナム人が重い税金や過酷な強制労働に苦しんでいた。このままでは、ベトナムに未来はないと、フランスからの独立を目指した青年がファン・ボー・チャウだった。ファンは、明治維新を成功させ、大国ロシアとの戦いにも勝利した日本に救いを求めた。日本ならベトナムの独立を手助けをしてくれると考え、大隈重信や犬養毅といった日本の政治家に援助を頼んだが、「武力だけでは、独立はできない。大切なのは、自分たちの母国の未来を思う若者を育てることです。」と助言を得るのがやっとだった。

ファンは助言を生かすため、ベトナムの青年を日本に留学させ、独立を目指すための人材を育てる運動を始めた。しかし、このことをフランスが黙っているわけがなく、日本政府に圧力をかけたのだった。当時、まだアジアの小国にすぎなかった日本がフランスに逆らうことはできず、やむなくベトナムからの留学生を国外退去にした。困ったのがファンをはじめとするベトナムからの留学生で、帰国費用もな



とほう
く途方に暮れていた。



この話を聞いて救いの手を差し伸べたのが、東京大学医学部を卒業し、神奈川県小田原市で医院を開業していた袋井市梅山出身の「浅羽佐喜太郎」だった。彼は、困っている人にはだれでも優しく、貧しい人からは治療費をとらないこともあった。また、学校や消防団などの地域の活動にも多額の寄付をして、多くの人から尊敬されていた。そのような人なので、例えベトナムからの留学生に対しても、佐喜太郎は生活の場を提供するだけでなく、一七〇〇円という大金を渡して支援したのだった。しかし、佐喜太郎にとっては取り立てて特別なことではなく、袋井の浅羽家では「佐喜太郎さんは困っている外国人を助けてあげたことがある」とだけ伝わっていた。

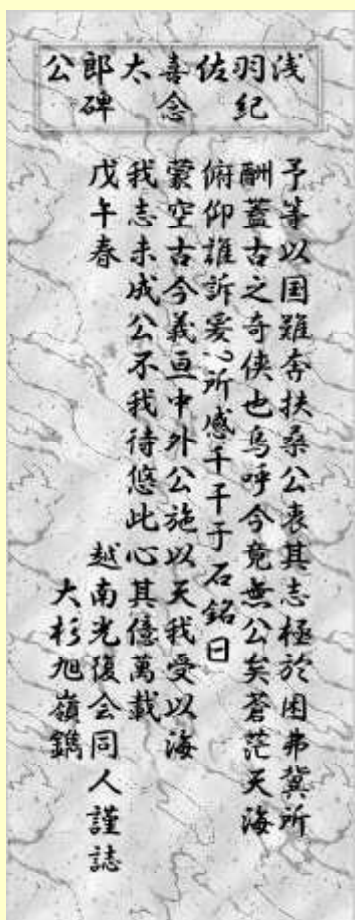
明治四十三年（一九一〇）、佐喜太郎は病のため四十三才の若さで亡くなった。大正七年（一九一八）、ファンは亡き佐喜太郎に感謝の気持ちを表すために袋井市梅山を訪れ、村人と力をあわせて常林寺に石碑を建てたのだった。その石碑には佐喜太郎への感謝の気持ちがしっかりと刻まれていた。

ファン・boy・チャウと浅羽佐喜太郎の思いは、後にベトナムの独立へとつながった。

ファン・boy・チャウと浅羽佐喜太郎の詳しい話を聞き、圧倒されていたはずのベトナムのエネルギーは、私に元気を与えるエネルギーに変わった。滞在中に街を歩くと、人々が笑顔で声をかけてくれた。何と言っているのか分からなかったが、心と心が通じ合っているような気持ちがした。

帰国後、私はファン・boy・チャウと当時の浅羽村の人々が建設したという常林寺の石碑を見に行った。漢字ばかりで、何が書かれているのかよく分からなかったが、一〇〇年近く昔に、ベトナムからこの袋井まで来て、石碑を建てたファン・boy・チャウの感謝の気持ちが分かるような気がした。今年は、日本とベトナムの外交関係が樹立されてちょうど四〇年になるそうだ。この四〇周年を祝う式典やイベントが予定されているようだが、それよりずっと以前に、ファン・boy・チャウと浅羽佐喜太郎によって、日本とベトナムの友好の架け橋が架けられていたことをとても誇らしく感じた。

常林寺の石碑



要約

私たちはベトナム独立のため日本に来了。佐喜太郎は私たちの志に無償の援助をしてくださった。これほどの方がいるだろうか。その佐喜太郎は今やこの世にいないという。この感謝の気持ちをどのようになだれに伝えたいのだろうか。